

復刊が出版界を救う!?

# これが書物の生きる道

ミリオンセラーになった吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』、テレビドラマ化もされた三島由紀夫の『命売ります』——。どちらも共通するのは、過去の作品のリバイバルだということ。出版業界の動向を長年見てきた清田義昭さんの目に、この現象はどう映るのか？

出版ニュース社代表

## 清田義昭

●きよた・よしあき 1943年生まれ。出版界の通信記事を中心とした旬刊誌『出版ニュース』編集長。出版評論で健筆をふるう出版界のご意見番。

### いまどきの出版事情

十五年くらい前に、戦後の新刊点数の総計を調べたことがあるんです。その時点ではたしか一八〇万点くらいだったと思うんですが、現時点ではこれまでにどれくらいの本が国内で刊行されていると思いますか？

——戦後七十年で出版されたすべて

じゃあ、この二七六万点のうち、本屋さんで買ったたり、注文したりして入手できる本は、何点くらいあると思いますか？ いまからずいぶん前に出た本でも出版社に在庫があれば入手可能ですから、そういう本も含めた版元在庫の数だと考えてください。

——年間八万点の新刊はとりあえず手に入るとして、でも、大型書店にある在庫検索機などで調べると、品切れとなっている本もけっこう多い印象がある。そう考えると、十数万点というところでしょうか。

それが、九八万点もあるんです。——そんなに!? これまでに刊行された本の三分の一強も稼働しているんですね。

二七六万という総刊行点数は『出版年鑑』上で数えたときの数字で、出版市場で入手できる九八万点とい

の単行本の数、ということですよ。そうですね。雑誌は入っていません。ちなみに、現在の一年間の新刊点数は、約八万点です。

——最近はよく出版不況といわれますから、もっと多い時期もあったのでは？

年ごとに出したデータがあるので、見てみてください（15ページ参照）。

——あ、刊行点数は年々増えている

うのは書籍協会の「Books」というサイトが「データベース日本書籍総覧目録」をもとに出している数字です。日本の出版社数は現在三五〇〇くらいですが、流通可能な本が一〇〇万点近くあるというのは、意外な事実ではないでしょうか。

——中小零細企業が多い出版業界ですが、それでも頑張っているんだなあという気がします。

会社規模が小さく、刊行点数もそれほど多くない出版社は、既刊本を少しずつ売りながら細々とやっている。でも、全体としては新刊主義で、刷ったぶんを売り切ってしまうのは最初から重版を考えないパターン。の刊行が多いようです。

先ほどのデータを見てもらうと、総刊行点数が一万点台から二万点台になるまでには、一九五〇年から七

んです。この総計となると、どれくらいになるんだろう？

まず一九五〇年から一万冊台をコンスタントにキープしだし、七一年に二万台、八二年に三万台……と増え続けて、二〇〇五年に八万台に達している。この感じだと、僕としては二〇〇万点くらいかなと思ったんですが、実際は約二七六万点。予想をかなり上回る数字でした。

一年まで、二十年以上かかっているのがわかります。それが、二万点台から三万点台では十一年、三万点台から四万点台は八年と、間がどんどん短くなっている。これは、それだけ新刊の数が増えているということです。

こうなると、どこの版元も既刊本より新刊本を売っていくしかありませんから、よくも悪くも重版比率は落ちてくる。岩波書店などでも、かつては七割ぐらいが重版だった。それがいまから二十年くらい前に新刊本と既刊本の売上比率が半々くらいになり、最近もかろうじてそれを維持しているといえます。

### リバイバルは重要な戦略

ちょうど、二〇一七年の出版界での十大ニュースについて原稿を書い